書　評・紹　介

ヨゼフ・エーマー著　若尾祐司・魚住明代訳

『近代ドイツ人口史―人口学研究の傾向と基本問題―』

昭和堂，2008年，224p.

本書は，Josef Ehmer (2004) *Bevölkeringsgeschichte und historische Demographie 1800-2000*, の全訳である．それに著者のエーマー教授による「日本語版への序文」と「訳者あとがき」が加えられている．「訳者あとがき」で説明されているように，ドイツの「歴史百科」という叢書の１冊として書かれたものであり，歴史学のなかの人口史というのが本書の第１の位置づけとなる．ただし，原題をそのまま訳すと，「人口史と歴史人口学：1800～2000年」となり，歴史学の一分野である人口史と人口学の一分野である歴史人口学が並立した題となっている．これに関しては第Ⅰ章第２節および第Ⅱ章第１節にくわしいが，「ドイツの大学にあっては，…西側の学問文化とは異なり，歴史人口学の研究の大半が人口学者ではなく，圧倒的に歴史家によって推進されている」(p.76)．さらに，「ドイツにおける研究の伝統は，人口史と歴史人口学の緊張関係によって特徴付けられる．人口史は，個別データを取りまとめ，大規模な人口集団に関する人口の過程と構造の再構成を追求する．他方，歴史人口学は個々の人間の行為や動機をも，その家族と家の文脈の中で視野に入れる」(p.9) エーマー教授はウィーン大学で教鞭を執る歴史学者である．本書は人口学的なテーマを歴史学的に論じているところに大きな特徴があるように思う．人口学の視野が狭いとは言い切れないかもしれないが，移民の問題などの今日的なテーマを含む人口学的な事象が，本書ではより広い，長期的な視点から位置づけられていることが印象的である．

章立ては大きく３章に分かれている．この章構成も本書の重要な特徴となっている．Ⅰ．全般的な概観，Ⅱ．研究の基本的問題と傾向，Ⅲ．資料と文献．第Ⅰ章の「全般的な概観」は，１．ドイツ人口史の地理的枠組み，２．資料：センサス，教会簿冊，民事身分登録簿，３．人口発展の初段階，４．長期傾向，の４節から成っており，原題の副題にある19世紀と20世紀のドイツの人口変化について概観している．そして第２章には以下の節がある．１．人口史と歴史人口学，２．人口科学と人口政策，３．移住，４．死亡，５．出生力と出生減少，６．結婚行動と婚外出生，7.19世紀および20世紀の人口史：「人口移行」か？　第Ⅱ章では，それぞれの研究トピックについてこれまでにどのような議論が行われてきたのかが解説されている．ただし，出生力低下や人口移動に関するドイツにおける最新の議論まで網羅しているわけではない．Ⅰ章とⅡ章の関連について，著者による「はじめに」を読むと，第Ⅰ章は19世紀と20世紀のドイツ人口の歴史的な概観，第Ⅱ章は，必ずしも評価の定まっていない人口学的な理論やモデルを用いてドイツ人口を論じることが意図されているようである．第Ⅲ章は本書作成に用いられた300を超える資料と文献の一覧が掲載されている．本書は膨大な既存研究の積み重ねを元に書かれたことがよくわかる．「訳者あとがき」によると，ドイツ語版の本書は大学生用の教科書ということなので，第Ⅲ章の充実した文献リストは学生にとっては非常に役立つであろう．

本書をヨーロッパの歴史人口学，ドイツの人口問題に関心のある方に強く薦めたい．上記の２つの特徴によって，ドイツにおける人口史，歴史人口学の研究動向が大変理解しやすくなっている．最後に残念なことを一言．翻訳は正確さを重視し，日本語としては読みやすいとは言えない．また，人口用語に関しては違和感を覚える訳語が少なからずあった．とはいえ，多少の読みにくさをがまんしても，読むだけの価値が十分にあることは疑いない．　（中川聡史）